たものだった．

そんな日々のなか，とくに印象深いのは，クチブトゾウムシをまとめられていた際，ちょうど私が深度合成写真の撮影に凝っており，森本先生のご希望でその方法をお教えしたことである．機材の扱いから，コンピュータでの合成，写真の修正まで，とても多くの手順があるのだが，すでにご高齢であったにもかかわらず，先生はしっかりと習得され，論文の出版にあたって膨大な写真を撮影された．もし私が森本先生の年齢であったなら，深度合成できれいな写真が撮れることは知っていても，そんな面倒なことには手を出さないし，できるとも思わなかっただろう．お教えしつつ，私は内心驚いていた．しかし，私がびっくりしたこのことも，森本先生の研究に対するご姿勢に関する，象徴的な出来事の一つに過ぎなかった．

それから森本先生のお話を聞き，成し遂げたご業績を知るにつれ，先生はこれまでにもさまざまな新しいことに対して，一切臆することなく，挑戦を続けてこられたことがわかったのである．森本先生の偉大な業績に関して，その詳細は最後に背中を見て学んだ辻君や今田君の紹介に譲るが，とにかく日本の昆虫学全体を見ても際立って突出したものであることは間違いない．その背景には先生の底知れぬ進取の気概があったのだ．

ちょうど1年前，職場の大学構内での引っ越しがあった．その少し前に森本先生が脳梗塞で倒れられた．私と学生たちは，先生が復帰されたら研究に専念できるよう，文献を配架した研究室を作り，その隣をゾウムシ専用標本庫にすることにした．退院後，その部屋をはじめてご覧になられた先生は，「研究室と文献と標本が並んでいる．やっと理想の研究室ができた」と予想以上に喜んでくださった．

とても嬉しかったのだが，同時に，森本先生のような人間国宝級の研究者が，理想的な研究環境をまったく得られていなかった事実を思い知り，私は怒りに似た感情を抱いた．森本先生の不遇は，分類学という学問の不遇を象徴しているようにも思えたからである．そこで，学内外の人たちに森本先生の偉大な業績とその重要性を知っていただこうと，辻君や今田君を巻き込んで，この夏に森本先生の展示を行なった．弟子の小島さんや吉武君，妹尾さんもお祝いの文章を寄せてくださった．そして先生と，先生の研究をずっと支えてこられた奥様にも見ていただくことができた．森本先生のご逝去は，その矢先のことである．

森本先生，先生が私財をなげうって収集された万巻の文献や，先生が構築された東洋一のゾウムシコレクションは，私たちが大切に受け継ぎます．そちらでも大好きなゾウムシの研究を続けてください．

2号館の森本先生

藤本博文

〒760–0005　高松市宮脇町 1–17–4

長年使い慣れたガラケーをスマートフォンに替えて随分経つが，未だに操作に戸惑う．あの時，9月4日の水曜日もそうだった．知人のお祝い事を知らせようとスマホの電源を入れると，使う予定のない Facebook の画面が飛び込んできた．そこには丸山宗利氏が前日に投稿された，「今日，森本桂先生が，亡くなられました」から始まる衝撃的な文字列が記されていた．数年前から体調を崩されていたのは存じ上げていたが，まさか，この瞬間に訃報を知るとは想像していなかったし，受け入れられるものではなかった．「不幸は，自分が知らない間に，知らない場所で，勝手に育っていって，ある日突然，目の前に現れる（村上　龍「69」）」という一節が頭を駆け巡った．知人の慶事を知らせるはずだったスマホは，次の瞬間，恩師訃報を告げる道具に早変わりしていた．

森本先生と初めてお会いしたのは1993年，九州大学の理学部に入学してすぐの頃だったはずである．理学部に入学したにも関わらず，農学部昆虫学教室に頻繁に遊びに行き（さぞかし邪魔だったろうと猛省している），標本作製のアルバイトまでさせていただいたりしていたので，当時教授であった先生とも頻繁にお会いしていたはずなのである．しかし悲しいかな，学部生前半の頃はゾウムシに対する興味や知識が皆無だったため，先生との接点は殆どなく，初めてお会いした時の印

象すら残っていない．それでも学年を重ねるごとに少しずつゾウムシ類にも興味を抱くようになり，先生のおられる教授室を時々訪れるようになっていた．学部時代のことで思い出に残っている出来事が二つある．一つは，福岡市の立花山で採集したニセナガアシヒゲナガゾウムシ *Habrissus analis* Morimoto を同定いただいたことだ．先生は記載論文を書棚から出してこられ，腹端の図を示されながらナガアシヒゲナガゾウムシ *Habrissus longipes*（Sharp）との違いを丁寧に解説してくださった．私が初めて「月刊むし」に投稿したのは，この時同定いただいた福岡県初記録のニセナガアシヒゲナガゾウムシの報告である．もう一つは，何かのきっかけで，話題が私と同郷の久米加寿徳氏に及んだ時のことだ．教授室に飾られてあったゴマダラオオヒゲナガソウムシ *Peribathys okinawanus* Senoh のペアの写真が久米さん撮影であること（この写真は「甲虫ニュース」137 号に久米氏自身が発見の経緯とともに発表されている），久米さんは採集の名人で，沖縄本島では当時あまり行われていなかった草地のスウィーピングで未記載のヒメゾウムシを採集していること等を教えてくださった（このヒメゾウムシは 1997 年に *Calyptorygus kumei* Yoshihara & Morimoto として記載され，現在は属が移動してカヤツリグサヒメゾウムシ *Limnobaris kumei*（Yoshihara & Morimoto）とされている）．当時から知己を得ていた久米さんのお話をうかがうことができ，自分のことのように嬉しかったのをよく覚えている．

そういえば，前述の標本作製のアルバイトでは，ツルグレン装置で抽出された土壌性ゾウムシの標本を作る機会もあった．この時作成したのは野村周平氏や大熊純氏採集の北部九州のサンプルが主だった．黒くて小さなゾウムシを次々と台紙にマウントしていったが，当時は，まさかこれらの標本が後の大論文の材料になるとは夢にも思わなかった．

森本先生とより深い関わりを持つようになったのは，シギゾウムシの口吻長とホストの関係をテーマに研究することになった大学院修士課程 2 年の 1998 年頃である．その頃には先生は退官され，農学部 2 号館 1 階にあった（昆虫学教室は 1 号館 3 階）標本室に毎日通われ，ひたすらゾウムシの研究に没頭されていた．シギゾウムシの知識がほとんど無かった私は，先生のところに頻繁に相談に訪れた．今思えば，先生の貴重な研究時間をいただく失礼な行為だったが，いつも嫌な顔一つせず相談に乗ってくださり，そして色々なことをお話ししてくださった．シギゾウムシに関する貴重なお話はもちろんだが，高知での少年時代から大学時代，さらには東京や熊本での林業試験場勤務の思い出と，話題は多岐にわたった．どのエピソードも，先生が心から虫好きであるのが伝わってくる内容だった．2010 年の新甲虫学会第 1 回大会の特別座談会が，森本先生の軽妙かつ飄々とした話術もあって大いに盛り上がったのを覚えておられる方も多いのではないだろうか（この座談会の内容は「さやばねニューシリーズ」3 号に掲載されている）．あの語り口を間近で伺うことができたのは大変な幸運で，むしろ昔話目当てに訪れていたような気がする．故・佐々治寛之先生や村上陽三先生が登場する学部生時代の武勇伝も面白かったが，ここでは詳細に触れない．ウスミドリシギゾウムシ *Curculio rai* Morimoto の「rai」が，宮武頼夫先生の「頼」にちなむことを知ったのもこの頃である．

さて，何度も足しげく 2 号館に通ううち，先生の方も私を虫好きと認識してくださったらしい．ある日学内ですれ違った際に，「おお，君．こないだ，空港の付近で草をばんばん叩いたらゾウムシが沢山落ちてきたんだけどね，これがどうも新種らしいんだよ！」と，満面の笑みを浮かべた先生に話しかけていただいた．このゾウムシが一体何だったのか今となっては知る由もないが，とにかく，同じ虫好きという「同志」として認めていただいたような気がして，この一件はとても嬉しかった．先生のお時間を頂いたにも関わらず私のシギゾウムシの研究は十分にはまとまらず，調査の過程で得られた一部知見のみしか発表できなかった．それでも先生にいただいた様々なご教示のお陰もあり，この時期，自分の世界は格段に拡がった．

「福岡県の希少野生生物－福岡県レッドデータブック 2001 －」の甲虫類の一部の執筆を任せていただいたのも，2 号館時代のご縁がきっかけである．福岡県内の同好会誌のバックナンバーや高倉康男氏の労作「福岡県の甲虫」に掲載された記録を種ごとに時系列に並べていくと，ヨツボシカミキリに代表されるように，昔は普通種だったにも関わらず現在ほとんど見られなくなった種がいくつか浮かび上がってきた．そうした種を掲載できたのは有意義だったが，校正時の 2000 年には私は郷里に戻って教員生活の 1 年目を送っており，虫に関ることが殆どできなくなっていた．結局，出版直前の校正を殆ど先生にお任せすることになってしまい，今でも大変申し訳なく思っている．

その後も先生は毎日 2 号館の標本室に通われ，クチブトゾウムシ亜科，特に長年の懸案であった

土壌性ゾウムシ類の分類に取り組まれる生活を変わることなく続けておられたようである．九大に職を得られた丸山宗利氏のブログでも様子をうかがい知ることが出来た．私は多忙に加え，興味関心の中心が香川県の甲虫相解明に移ってしまい，シギゾウムシの方は完全に休眠状態になった．甲虫学会（旧・鞘翅学会）の総会では毎年先生とお会いした．かつて時間を割いて教えていただいたにも関わらずシギゾウムシの研究を続けていなかった私は内心合わせる顔がなかったが，先生はいつも優しく接してくださった．鞘翅（現・甲虫）学会のゾウムシ分科会では，先生の研究の進展状況をほぼ毎年伺うことができた．学生時代には全く縁がなかった土壌性ゾウムシだったが，高校での生物の授業用に作成したツルグレン装置で香川県内の土壌を抽出したところ，各地で得ることができた．ちょうど先生は全国のツヤツチゾウムシ属（*Asphalmus* 属）のまとめにひと区切りをつけられ，ツチゾウムシ属（*Trachyphilus* 属）のまとめに取り掛かられていた頃で，私が採集したサンプルも研究材料に加えていただいた．先生の土壌性クチブトゾウムシ亜科の研究成果は 2015 年に「日本の昆虫第 4 巻　ゾウムシ科　クチブトゾウムシ亜科 (2)」として結実したが，香川県東かがわ市大坂峠（東かがわ市には「大坂峠」が 2 か所あるが，東かがわ市坂元の大坂峠を指す）産の個体群にはヒガシカガワツチゾウムシ *Trachyphilus fujimotoi* Morimoto と，対岸の小豆島で妻が採取した土壌（当時の姓は佐々木）から抽出された標本にはショウドシマツチゾウムシ *Trachyphilus sasakiae* Morimoto と命名していただいた．この「夫婦に献名」事案は先生も気に入られていたようで，ゾウムシ分科会の発表だけでなく学会懇親会後の二次会でも何度か取り上げられ，先生が私を語る際の枕詞になっている節もあった．私としては，各々のファーストネームを付けてほしい気持ちもないではなかったが，流石に恐れ多くて言い出せなかった．

日本産のツチゾウムシ属は研究が進むにつれ未記載種がどんどん出現し，とどまるところを知らない様子であった．確か 2008 年か 2009 年頃だったと思う．鞘翅学会の折に「ツチゾウムシ属は今何種になったんですか ?」と無邪気に質問したところ，これまで見たことがない程のくたびれた表情で「おぉ…それがねえ，88 種だったんだけど，さっき休憩室で○○君が標本を持ってきてくれて，もう 1 種増えそうなんだよ…」と答えてくださった．大変な種分化が起こっていることを承知の上で研究を開始されたのだろうが，膨大な未記載種の存在に加え，単為生殖種と両性生殖種が入り混じって分布する複雑な状況を解きほぐすのは，激しく消耗する作業だったのだろう．先生はこの頃を境にツチゾウムシ属のまとめに区切りをつけられ，クチブトゾウムシ亜科の残りのグループ，さらにはキクイゾウムシ亜科のまとめへと進んでいかれたようである．

私が先生に恩返しできたことが二つだけある．一つは「昆虫と自然」誌の「シギゾウムシ特集号（2011 年 4 月増刊号）」の執筆依頼を先生から頂いた時である．前述の通りシギゾウムシの研究は休眠状態だったものの，生活史や分布の新知見を気づく限りアップデートしていたのが幸いして，何とか原稿を完成させ，かつてのご恩に報いることができた．もう一つは，久米さんと私が幹事で，愛媛県の成川渓谷付近を会場に行った 2013 年の JWIN（日本ゾウムシ情報ネットワーク）の採集会である．採集会数日前に現地に入られた先生は足摺方面や黒尊林道まで足を伸ばされ，当時まとめられていたオビモンヒョウタンゾウムシ属（*Amystax* 属）を各地で採集されていた．この時の標本は本属の検討材料にも使われており，高知県西部から愛媛県南西部の一部にかけての個体群は，ササオビモンヒョウタンゾウムシ *Amistax sasanus* Nakamura et Morimoto と命名された．興味深いことに足摺岬に分布する個体群は，四国に広く分布する（香川県は除く）シコクオビモンヒョウタンゾウムシ *Amistax shikokuanus* Nakamura et Morimoto だという．はじめに先生の採集の行程を聞いたとき，内心「足摺も成川渓谷も同一種では」と思っていた私は，別種だったことを後でうかがい大変驚いたものである．

クチブトゾウムシをまとめられた後，いよいよ先生はキクイゾウムシの分類に本格的に取り掛かられた．2015 年，2016 年甲虫学会大会でのゾウムシ分科会で，先生はキクイゾウムシについての発表をされている．しかし先生とお会いしたのは，この 2016 年の甲虫学会が最後になった．

2017 年に先生が体調を崩されたこと，その後回復されリハビリに努められていることは，周囲からうかがっていた．2019 年 8 月 20 日に九州大学博物館の「森本桂とゾウムシ展」を見に行った際も，展示パネル中の「奥様に支えられ毎週のように研究室に復帰されている」という記述に安堵していたところで，程なく訃報に接するとは思わなかった．直系の弟子でなく，研究も続けていない自分が出しゃばってはいけないと思っていたが，やはり一度お会いしておくべきだったと悔いが残る．

この文章を書いている間も，2 号館の一室で顕微鏡の前に座られ，インロー箱やユニットボックスに満載されたゾウムシ標本に囲まれて研究されている先生のお姿が脳裏に浮かんでくる．先生からは，研究に取り組む姿勢を知らず知らずの内に教わった気がする．また，先生はある年の鞘翅学会で「大学の講義は 60 点あれば「可」をもらえる．たとえ不完全でも，とにかく（論文を）出すことが大事だ」いう意味のことをおっしゃったことがある．勿論，誤りや嘘ばかりの論文を出すことは論外だが，自分の得た知見を論文として発表することで，後の人々が検証し，更に良いものを積み上げられるようにするのは非常に大事である．先生は研究史という大きな流れの中に身を置き，生涯研究者としてそれを実践されていたのではないだろうか．

ちなみに，全国の大部分の高等学校では，30 点で単位が認定される（と思う）．私も先生の言葉をやや拡大解釈し，自分の得た知見を，たとえ 30 点であっても細々とアウトプットし続けていこうと思う．

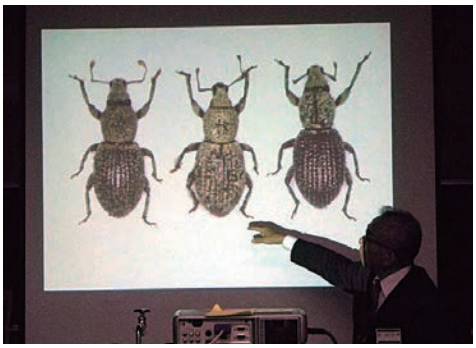

写真 1．2010 年の甲虫学会（大阪）
ゾウムシ分科会で発表される森本先生．

森本先生の研究のあしあと

辻　尚道・今田舜介

〒 819–0395　福岡市西区元岡 744 番地　九州大学大学院昆虫学教室

はじめに，今年 9 月 3 日に急逝された森本先生のご冥福をお祈りするとともに，そのゾウムシにかけた生涯を傍らで支え続けたご遺族の皆様に，謹んでお悔やみ申し上げます．

森本先生がご自身の生涯を通して行った研究は，今日の日本の昆虫分類学，応用昆虫学の礎を築くものです．その偉大な業績の数々は到底限られた誌面で語り尽くせるものではございませんが，本稿では，先生の主要な業績のひとつであるゾウムシ上科甲虫の分類学的研究について，僭越ながらその概要をまとめております．

本稿を草するにあたり，多くのご助言をいただいた九州大学総合研究博物館の丸山宗利博士に厚くお礼申し上げます．

生物の分類体系は，クジラを魚ではなく哺乳類の一員とみなすように，外見的な特徴の類似性よりも，互いに相同な形態の比較により類推される系統的なまとまりを重要視した体系を構築することで，その生物の進化過程の研究など，発展的な研究に用いることのできる体系ができると考えられます．森本先生が研究を始めた当初，世界のゾウムシ上科全体の高次分類体系には形態情報の少ない Lacordaire（1863）の体系が 1 世紀にわたって踏襲されており，解剖と詳細な形態観察に基づく比較形態学を取り入れた分類体系は提唱されていませんでした．また，日本のゾウムシ相はごくわずかな種がそれぞれの科・亜科で断片的に分類が進んでいるのみで，その多様性の理解には到底及ばないものでした．これらの状況から，森本先生のゾウムシ研究は解剖を伴う詳細な形態比較による高次体系の提唱と，日本産ゾウムシ上科のファウナ解明を目的として開始されました．

1962 年に出版された森本先生の学位論文，“Comparative morphology and phylogeny of the superfamily Curculionoidea of Japan”では，ゾウムシの体の各部位の形態について，系統関係の推定に重要な脛節先端部の形態や解剖でしか観察できない Metendosternite や Proventriculus，生殖器官の構造に特に注目して，ゾウムシの主要な科や亜科のもつ形態をまとめました．これはその後のゾウムシの分類学に大きく影響を及ぼし，今日でもゾウムシ分類学を学ぶ人であれば誰しもが参照する重要な論文となっています．また，森本先生はその後も幼虫の形態や成虫の口器の形態について，指導した学生たちと共にゾウムシ上科全体について